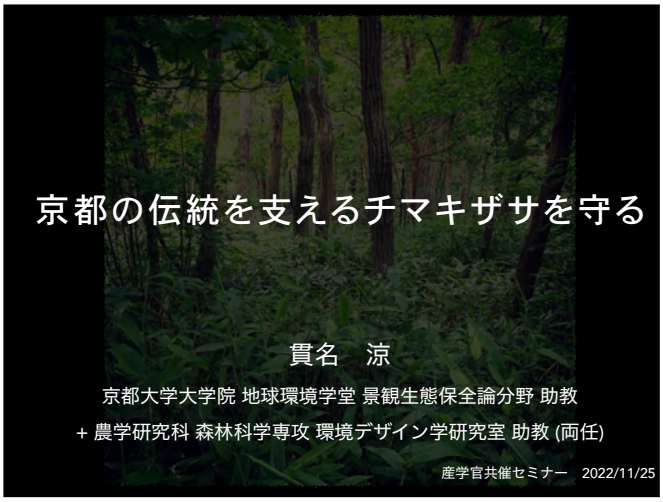
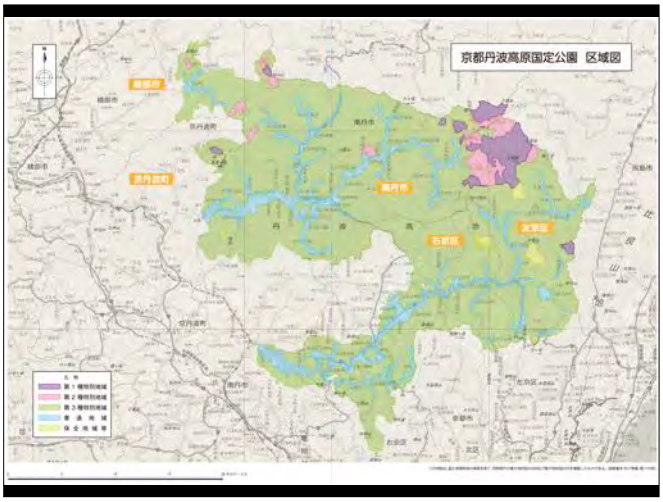


1



2

3

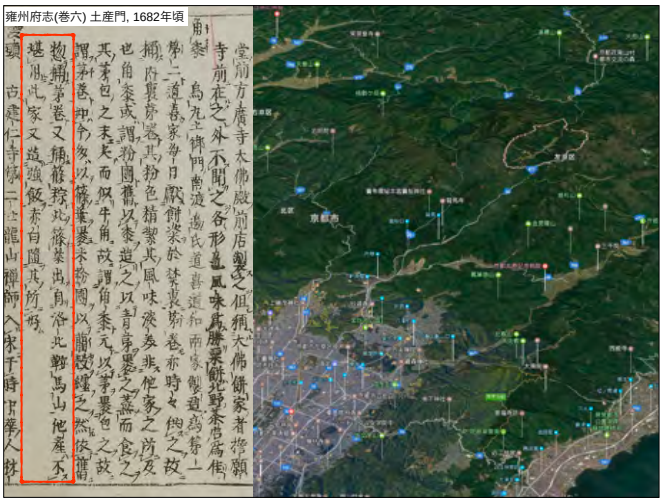
4

京都市左京区
花脊別所町

“チマキザサ”
の主産地

古くは”洛中”を支える
資源循環圏の一つ
(笹、鞍馬炭、黒文字、
山椒、製紙原料...)

5


雍州府志(巻六) 土産門, 1682年頃

6

炭焼き小屋とチマキザサ
(花脊別所町、1960年代、個人蔵)

かつては林業、
特に薪炭生産が基幹産業。
副業としてササ採集など。
農業は自給的。

7

集落をゆく女性
(花脊別所町、年代不明、個人蔵)

ササとクロモジらしき枝
を背負っている

8

大原百井町にて, 1960年頃, 個人蔵

9

手作業で選別加工

美しい葉だけが商品となる

10

ササを干す, 現代

11

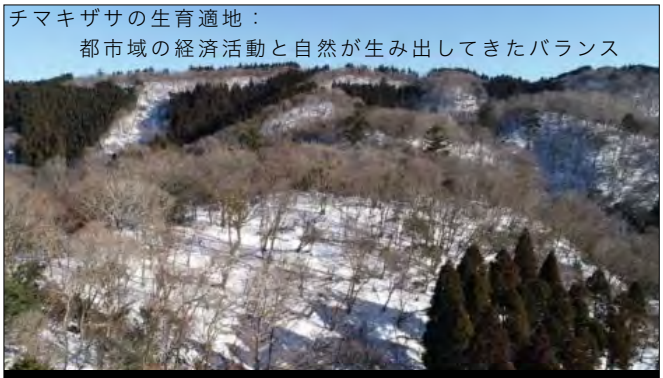
花脊別所
暮らしの風景

地域で生きる姿
それ自体が美しい

Old woman processing the Sasa
Hanase-Bessho Village (cir. 1960s)

(C) 藤井靖子

12



炭焼き → 街道経由で京へ出荷 → 都市へのエネルギー供給 + 中山間地の主たる現金収入

↳ 管理された明るい薪炭林 → 多様な下層植生が生育 → ササなどの有用植物を都市へ出荷し さらなる収入

↳ 鳥獣も増加・多様化 → 食料・さらなる収入(かつては野鳥これからはジビエ)

↳ 上層木の択伐・低負荷のササ採集 → 早期に資源回復 → 持続可能な生業・景観保全

13

古くから続く SDGs & NbS /Nature based Solution (暫定・定性的)

山暮らしの収入源

全世代が従事

女性中心の仕事

薪炭の供給

グリーンインフラ

都を支えて1200年

炭素固定・循環

持続可能な採集法

自給的農村

環境教育・TEK

水源の森

地域の生業

ササは共有資源

資源再生・循環

森里海連関

共同体の維持

…etc

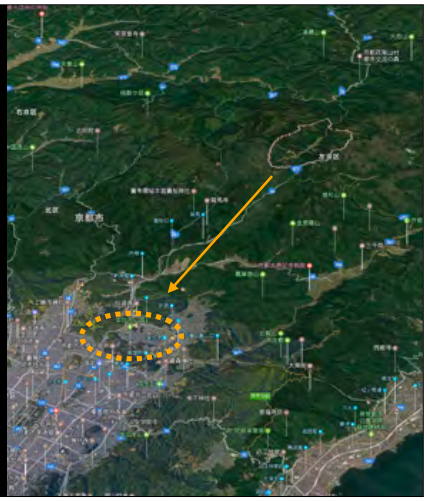
"伝統"として続いてきた生業には、続いてきただけの理由がある。

14

鞍馬街道を経て、

京都市北区

深泥池周辺へ



15

「ちまき」づくり @深泥池

16

深泥池から

洛中へ

祇園祭山鉾町

17

各鉾町で飾りつけ

18

19

20

全国に代替品があるのに、
なぜ京都のササにこだわる？

21

- 歴史の中で選別・採集・乾燥加工の技術が培われてきた。
  - 葉が大きく、利用しやすい。
  - 葉の裏に毛がなく、加工性や口当たりが良い。
  - 天日干しで調製され、香りが良い。
- 洛中で好んで用いられ、約1000万枚/年の需要がある(阿部, 2011)。

22

洛中の人々には「北山のチマキザサ」が好んで用いられ、
数世紀に渡って祇園祭や京料理、和菓子といった文化を支えてきた。

現在、このササが **危機的状況** に。

- 2000年代に 一斉開花・枯死 による ササ資源の枯渇 が発生
  → 京都市での流通が完全に停止 (→ 他産地の代替品で対応)

普通はタネから再生するはず…

- 複合的な要因によるササの再生阻害
- 産地である農山村の高齢化・過疎化も、資源利用の技術(在来知)の消失を引き起こしている。

→ 身近な植物の危機で、先人が築き上げた文化が揺らぐ。
→ なんとかチマキザサ再生の取り組みを！

23

再生が進まない種々の要因 ①

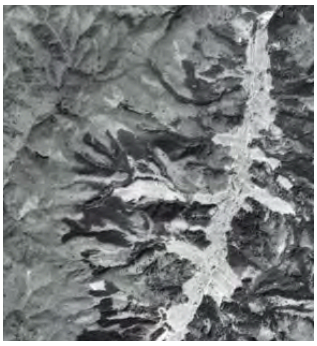
- 一斉開花による資源量の激減
- 増大した**シカの食害**による再生阻害
  - ➡ ひと尾根から20頭以上を捕獲した年も
  - ➡ 新芽が食べられ、資源賦存量の低迷が続く

24

再生が進まない種々の要因 ②

- **生息地の減少**: 「管理された適度に明るい落葉樹林」の減少

∵ 薪炭利用の減少。過疎高齢化による管理者の不足。スギヒノキ造林地の増加。

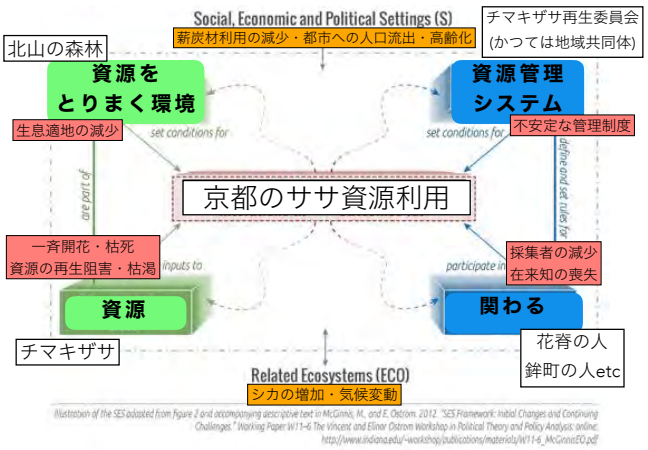


1948 米軍

2010 国土地理院

25

ササを取り巻く状況を包括的にみると…



26

再生活動のはじまり

27

関わる主体の変遷

年	主体
~2003	花脊別所周辺の地域住民
2004~2007	チマキザサ一斉開花・枯死
~2010	研究者 (京大等)+京都市関係局
2010~	上記 + 京都市未来まちづくり100人委員会(山紫水明の京都チーム)
2011~	上記 + 左京区役所が共催になり、イベントを実施
2013~	チマキザサ再生委員会として再組織

・貫名自身は2011~辺りから参入。2013~の委員会において企画開始。
・当面は再生委員会の形で継続予定。

28

チマキザサ再生委員会

- 構成員
  - 京都大学
  - 左京区役所
  - 京都市関係部局
  - 生産地の自治会(花背)
  - 消費地の自治会(山鉾町) など
- 内部組織である「チマキザサ再生研究会」が研究で得た知見をベースに活動を企画立案している。
- 市民有志、民間企業や教育分野などの外部機関とも連携
- 調査研究・普及啓発・現場活動の３本柱で、保全を進めている。

29

再生に向けた取り組み例

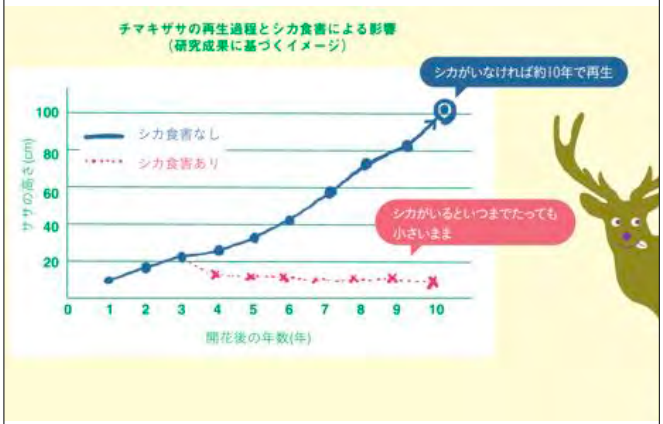
- **調査研究の一例**

＜花脊＞

調査地概要

Study Site

30



31

再生に向けた取り組み例

- **普及啓発**
  - 各種講演会・フォーラム・市民向け体験イベント
  - 小学校での教育プログラム
    - 京都市立高倉小学校 (消費地・出身校)
    - 京都市立花脊小学校 (生産地・研究フィールド)
    - ササを通じて両者を結びつけた交流。
    - 現在では花背で採取し、高倉小で育てた苗を、花背小に返し、また新たな苗を預かるというサイクルが出来ている。
    - 各自の地域とササの関わりについて児童が調べ、発表したり、訪問したりする中で、単なる希少種の保全にとどまらず、児童が地域のあり方を考える機会に。

➡ 2016年度 「博報賞」および「文部科学大臣奨励賞」受賞

32

再生に向けた取り組み例

- **現場活動**
  - 域内保全
    - 市民ボランティアと防鹿柵の設置
    - 民間企業と防鹿柵の共同開発・設置
  - 域外保全
    - 京都市動物園・京都水族館等での植栽や展示への協力
    - 町家店舗の庭やマンション等の緑化へのササ苗提供
    - 武田薬品京都薬用植物園でのササ苗増殖

など

33

H29年度からは
京都市林業振興課が
チマキザサ保全を事業化。

市民レベルで
先行して保護していた箇所や、
新たにササが確認された場所に
金属製防鹿柵の設置を開始

直近は環境省
生物多様性保全推進支援事業
(里山未来拠点形成支援事業)
の交付を受けている。

34

まとめ

- 京都のササ文化に何が起こったか
  - ・数世紀にわたって、平安京の生活や文化を支えてきた。
  - ・一斉開花によって、ササ資源が突然枯渇。
  - ・従来のサプライチェーン / 資源利用システムが崩壊。
  - ・祭礼や食文化といった京都で培われてきた文化の危機。
  - ・山間地におけるコミュニティの危機。
- ササの保全の現状
  - ・産官学民連携により約10年で資源再生への道をつけることはできた。
  - ・地域では担い手組織が採集-加工-販売を開始。
  - ・京都市生物多様性プラン(2021-2030)等とも連動し、次の展開へ。

35

関連情報

京都市生物多様性ポータルサイト　“京・生き物ミュージアム”

コラム　https://ikimono-museum.city.kyoto.lg.jp/06/20150123/

最新情報　https://ikimono-museum.city.kyoto.lg.jp/chimakizasa/

コラム　最新情報

36